

月報

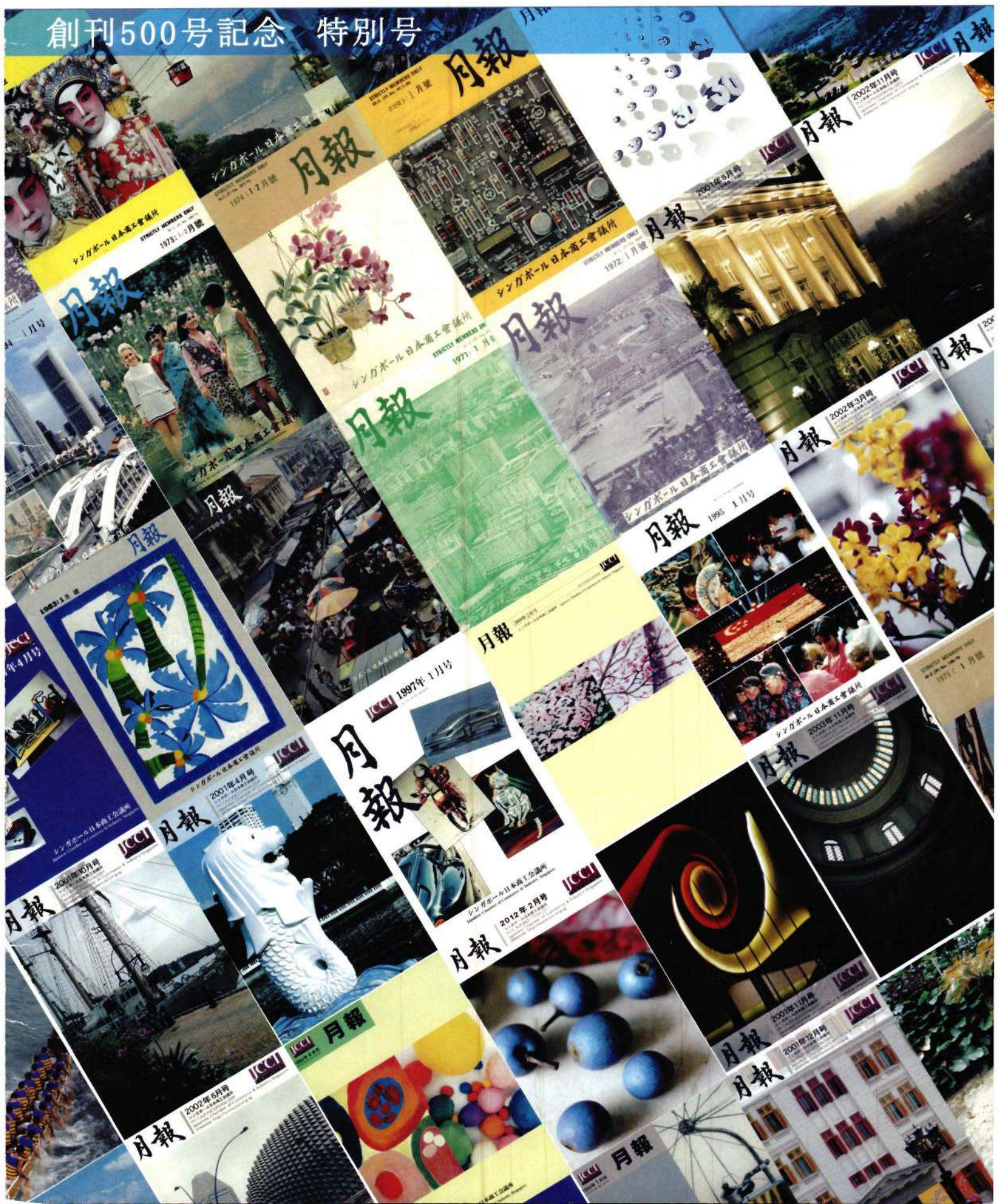
2012 年 7 月号

シンガポール日本商工会議所
MICA (P) NO. 048/04/2012

Japanese Chamber of Commerce & Industry, Singapore
Website: <http://www.jccci.org.sg>

JCCCI
SINGAPORE

創刊500号記念 特別号





ANNIVERSARY

2002 ~ 2012

Celebrating 10 Years!

Crowe Horwath First Trustはおかげさまで創立10周年を迎えました。

シンガポールのミドルマーケットを得意とする会計事務所として、
お客様のさまざまなニーズにお応えするために
高品質のサービスを幅広く提供してきました。

会計監査、コーポレートファイナンス、企業再生、
ファンドアドミニストレーション、リスクアドバイザリー、
税務、移転価格、アウトソーシング
およびジャパデスクサービスを提供しております。

これまでの10年間と同様、最高水準のサービスを提供してまいります。
これからもCrowe Horwath First Trustのプロフェッショナルサービスにご期待下さい。

8 Shenton Way
#05-01 AXA Tower
Singapore 068811
Tel: +65 6221 0338
Fax: +65 6221 1080

Email: enquiry@crowehorwath.com.sg
www.crowehorwath.com.sg

ジャパデスクお問い合わせ先
三宅 周兵 (日本国公認会計士)
Email: shuhei.miyake@crowehorwath.com.sg
Telephone: +65 6221 0338 ext 887



Crowe Horwath.

Audit | Tax | Advisory | Outsourcing

月報

2012

Jul

<特集>

- 月報500号発行に寄せて p02
シンガポール日本商工会議所 会頭
日下 清文
- 『月報500号記念 特別号』編集発刊にあたって p03
広報委員会 幹事長
中島 茂
- 「月報と広報委員会」の歩み p04
広報委員会 オブザーバー（前幹事長）
門伝 好司
- 月報表紙写真、内容にみる時代背景、変遷 p08
広報委員
本田 智津絵
- 特別掲載 月報創刊号 p13
- 月報創刊時の思い出 p20
初代広報委員長
荻原 雄二郎
- JCCI現役の広報委員よりメッセージ集 p22
広報委員
- JCCI広報委員会創刊500号 編集後記に代えて p31
広報委員会 委員長
河原畑 敏幸

<事務局便り>

- 6月の行事報告、7月の予定 p34

月報題字: 麗扇会 青木 麗峰

写真タイトル: 創刊号からの月報表紙写真

JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY, SINGAPORE
10 Shenton Way # 12-04/05 MAS Building Singapore 079117
Tel: 6221-0541 Fax: 6225-6197 Website: <http://www.jcci.org.sg>

月報500号発行に寄せて

シンガポール日本商工会議所 会頭
NEC ASIA PACIFIC PTE LTD

日下 清文



シンガポール日本商工会議所機関紙「月報」が創刊500号となることにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

シンガポール日本商工会議所は、シンガポールが独立したわずか4年後の1969年8月22日、56社で創立総会を開催し産声を上げました。機関紙「月報」はその半年後、1970年1月に発刊され、42年後の今日に至るまで、休むことなく発行されております。これもひとえに、ご執筆にご協力いただいたお一人お一人のご協力はもちろんのこと、会員の皆様のご支援による賜物と感謝申し上げます。

「月報」は、「会員の皆様のシンガポールでの経済活動に役立つ情報を提供する」という目的の下、毎月様々な分野の方よりご寄稿いただいております。企画・編集には会員有志からなる広報委員が携わり、有意義な企画を検討しています。寄稿内容はシンガポール国内の経済状況をはじめ、法律、文化、各業界の最新動向や周辺国についてなど多岐に渡る情報の掲載を心がけ、毎月会員の皆様へお届けしております。

シンガポール日本商工会議所の今年の基本方針の一つとして、「多様化する会員企業のニーズに即した幅広く有益な情報の提供」ということを掲げました。これは本会議所の設立趣旨にも関わる基本方針のひとつでもあります。設立以来、絶えることなく発行し続けてきた「月報」も、この基本方針にのっとり、今後もシンガポール日本商工会

議所と共に歩み続けたいと思っております。

どうか引き続きのご指導、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

『月報500号記念 特別号』 編集発刊にあたって

シンガポール日本商工会議所 広報委員会幹事長
NTA TRAVEL(SINGAPORE) PTE LTD

中島 茂



1970年1月に手書ガリ版印刷での創刊号発行。

そして2012年7月、記念すべき500号の発行を迎えることができましたことは、長年にわたるJCCI会員・読者の皆様のご支援、そしてご執筆者の皆様、発行に携わってこられた広報委員とJCCI事務局各位のご協力のおかげと心より御礼申し上げます。

節目の500号は、過去の特集記事を振り返りながら創刊当時から現在に至るシンガポールの時代背景と編集にまつわる話などを交えてお届けします。

表紙には代表的なバックナンバーを並べ、シンガポール日本商工会議所の日下会頭のご挨拶、長きにわたり幹事長を務めていただき月報の生き字引とも言えるオブザーバーの門伝さんに月報と広報委員会の歩みを解説いただき、広報委員の本田さんには創刊号から現在に至る表紙写真や内容にみる時代背景と変遷を駆け足で振り返ってもらいました。そして原点でもある創刊号の復刻版を掲載し初代広報委員長(委員長の役割は、歴代の日本航空の支店長に務めていただいております)の萩原さんから創刊当時の思い出エッセイをご寄稿いただきました。さらに現在の広報委員からの苦労談や一言、最後に河原畑委員長の編集後記という永久保存版さながらの内容となっております。

月報に掲載される特集記事のキモは、担当広報委員の目のつけどころです。

様々な業界を代表する有志21名の広報委員から出されてくる企画案は、業種、興味、趣味趣向さらには在星期間の長短により多種多様です。

現在開催されている月一回の広報委員会は、いわゆる目的を一つとした異業種交流会、会議というよりフリートーキングの場と化しております。その席では、企画発案に至った理由、執筆者のプロフィール、さらには業界人御用達のトリビア情報などが飛び交いますが、企画案の検討を通して切り口の違ういろいろな話を伺っていくのは楽しい作業でもあります。企画を練り上げるまでの苦労話などは後のページにゆずりますが、このような場を経ながら執筆者からいただいた記事が月報に掲載されていきます。

アジアへの注目度の高まり、さらには経済活動のボーダレス化が進む中、シンガポールにとどまらずシンガポールをハブとした近隣諸国にかかわる記事が増えてきているのが最近の傾向でしょうか・・・。

仕事や生活上の疑問に答えを必要とするとき、さらにはシンガポールにかかわるプラスアルファの蘊蓄を増やしたいとき、月報の情報が少しでも皆様のお役に立てればこのうえない喜びです。

JCCI広報委員会では、これからも「幅広く有益な情報提供」を心がけながら月報を発行してまいります。引き続きのご愛読、広報委員会へのご協力とご支援をよろしくお願い申し上げます。

JCCIのウェブサイト(<http://www.jcci.org.sg/>)には、過去10年分の記事がPDFファイルにてアップロードされております。JCCI会員の皆様は、自由に閲覧いただけますので是非ご活用ください。

「月報と広報委員会」の歩み

シンガポール日本商工会議所
広報委員会 オブザーバー（前幹事長）
門伝 好司



月報と広報委員

変わることは常に人と時と共にあります。月報も41年半の長い年月を変わりながら続いています。私はその歴史の中の後半分だけしか広報委員を体験しておりません。僭越であり、拙文で恐縮ですが、その間に見てきた「歩み」を月報の編集を中心に紹介致します。

まず、広報委員について。変わり続けている中で、本号に復刻された創刊号からご理解いただける目的と趣旨は今でも月報に受け継がれています。この力の源が広報委員です。委員は部会（或いは業種）別に広報委員会に参加をお願いした会員から選出されます。広報業務を担当された方とは限りません。編集は年に一度、2名一組で担当します。この基本的な骨格を維持するために、委員の交代は同じ会社内から選任していただくか、それが難しい場合は同業種の会社をお願いします。編集は、あらゆる業種を対象に情報を発信する「目的」故に、シンガポール国内に加えて近隣諸国の関連する出来事にも幅広く目を配り、必要に応じてタイムリーであることを委員に求めます。これは結構、重い。一方でテーマを絞り込むこともできる企業の広報誌とは異なり、統一感が欠けるでしょう。編集案をまとめるために委員は各々の工夫をされていると思います。私は編集当番が近づくと、普段はあまり読まなかった新聞を隅から隅までなめまわしました。これは良い勉強になりました。自分自身が詳しく知りたいテーマを掘り下げていただく提案も致しました。先を越されて代案さがしとなり、途方に暮れたこともありました。

別の選択は、執筆をお願いできそうな方を‘ターゲット’（失礼）にして、その方の専門や得意分野を取り上げさせていただく、言わばテーマの後付けです。当方のピンボケと勉強不足が原因で、ご迷惑をかけたこともあったと思います。

編集案をまとめて、相方の委員と提案内容が重複しないことを確認して、執筆依頼先を相談したり、必要に応じて事務局にサポートを依頼します。担当する月には提案趣旨と内容の概要を提案書にして、委員会に諮ります。長くなりましたが、これが基本的な流れです。しかし、全ての記事が全会員に受ける（？）ことはありません。記事のうちの一つでもお役に立つことを願って続けます。ご理解を賜れば幸いです。

変わらないこと—創刊からの基盤

1. 広報委員の貢献と会社の理解

私は1988年8月に広報委員会に加わりました。その当時の石川静彦事務局長の‘甘い誘い’がきっかけでした。曰く、「とても気さくな委員の皆様と、月に一度だけ気楽にお昼ご飯を食べに来る気持ちで」と。実際に委員の方々はその通りでしたし、自分の行動範囲が一挙に広がったように、普段は何うことができないお話を拝聴できました。当時のJCCI会議室でいただく月替わりのお弁当も楽しみでした。今も同じ様な手口が使われているようです。しかし、どちらが甘かったかはすぐに判りました。そのお弁当は毎月2時間の委員会では払い切れずに、編集当番に回ります。前述のようにこの当番は想うより重く、時間もかかり、しば

しば勤務時間に食い込みました。この思いを知りつつも、自らお辞めになる委員を、幸いに私は一人も見えていません。委員個人の貢献をサポートして、月報に費やす時間を認めて下さる会社の理解にも感謝、感謝です。近隣国の商工会議所は隔月や季刊を採用している例もありますが、シンガポールは毎月を守っています。皆様の努力と理解の賜物です。

2. タブー

企業とビジネスが対象ですから、政治問題と宗教活動には触れないのが基本です。そして、ご執筆いただく際には記事の内容に直接関連があったり、説明を補足するために必要な場合を除いて、個々の企業や商品の宣伝広告にならないようお願いしています。また、記事は日本語で掲載します。筆者と読者の間に異なる解釈が生じることを防ぐことが目的です。専門用語は門外漢にも分かりやすく解説をお願いします。日本語以外のご寄稿文は担当委員に翻訳していただき、筆者と内容の確認をお願いすることが原則です。このようにいろいろな注文があるんですよ。タブーではありませんが、日本人会とは相互理解があり、こちらは企業向け、あちらは家庭、家族向けが原則です。

3. 全ての編集提案を月報に

委員会の美点であり、肝です。提案趣旨の説明に対して、他の委員からは質問や意見に加えて、提案内容が他業界に関連したり、専門分野外であっても興味を持ったことを追加する希望や、編集案の切り口を少し変えるアイデアが出ます。時としてビジネスに関係が薄い提案もありますが、あちらに流れないように少々の軌道修正をしていただき目的を完遂します。一つ一つの提案を尊重して、一旦スタートしたら全員でゴールを目指す姿勢です。

4. 薄謝

ご紹介すべきことか迷いますが、事実としてお伝えします。業務ご多忙にも拘らず時間を割いてご執筆して下さる方にはお礼を申し上げると共に、それを形に表現しています。ご執筆のお礼と言うよりは、同僚の方々と何かに遣っていただくの

が趣旨ですが、今では‘何か’をさがすことが難しいほどでしょう。本当に薄いのです、気持ちとは異なります。

変わったこと—歴史の一部

1. 軽く

1988年当時は委員の数が現在の半分ほどで、大使館と日本人会からのオブザーバーの方に主に執筆依頼先についてアドバイスを頂戴しました。編集当番は現在の倍で、年に二度も回ってきました。編集案も今より一本多く、一人当たり3本以上がノルマでした。アツと思う間に、ローカル新聞と再び睨めっこです。先輩委員の皆様が淡々とこなされているので、蛮勇を奮って伺ったところ、半年に一度のお務めは「少々、過多」である事が判ってホッとしました。その後、お弁当の消費頻度が抜群だったことが理由で幹事長を拝命したのを機に、‘お務め’と‘本数ノルマ’軽減を模索しました。前者は、会員が増加していた背景を利して、業界の隙間を埋めることを表の理由に、委員の増員をお願いしました。幸いに反対はありませんでした。委員が概ね20名に倍増して、広報委員会はJCCI内で最大の規模になりました。同時に月報の守備範囲も広がったと思います。結果オーライ、でした。でも、真の付加価値は、背広ネクタイとYシャツだけだった会議室に女性委員が加わり、和やかに華やかになったことでしょう。後者は「業界動向シリーズ」(現在は「業界ぶらす1」)を新設して、ローテーションを組んで継続することに承諾をいただきました。現在のベースができました。

2. メールマガジン

2002年に会員とJCCI間のコミュニケーションを更に密にすることを目標に、メルマガを立ち上げるようになりました。ご承知の通りに今も続いています。会員に参加していただくために、巻頭エッセイを募集したり、情報交換や営業活動の一部にご利用いただいています。このために「メルマガ小委員会」が生まれ、そちらの係に詳しい有志の方々が追加の支援を買って出てくださいました。感謝です。

3.時代の凸凹

1990年代の後半に900社に届く勢いだった会員企業数が、アジア通貨危機後の短い数年間に企業合併や撤退、近隣国への移転などが相次ぎ、100社以上減った結果、予算調整は避ける事ができない状況になりました。「月報」を隔月発刊にする案も出ました。コスト節減効果は少なさそうだったけれども、印刷文字サイズを小さくしてページ数を減らしたり、紙質を変えるなどの工夫もやりました。でも隔月にする事に賛成する委員は、一人もいませんでした。広報委員長のご努力により、理事会も名実ともに月報維持をご理解下さいました。「隔月報」は様になりませんからね。

しかし、結局は電子化の可否を問うアンケート結果と流れに棹させない状況に鑑み、2004年新年号から紙廃止が実施されました。読み物は紙に印刷してあるものと決め込んでいた人間(当時の委員長と私でしたが)もいましたが、致し方ない変化でした。真空管はデジタル信号になりましたが、「月報」が守られたことが救いでした。電子版月報は一年分をまとめて復刻版と称して配布されました。

4.紙に戻る

2006年4月に「月報」が印刷物に復活しました。やはり印刷された月報を毎月受け取ることが読者に最善、と再認識された結果でした。電子版は受け取った感覚が薄れ、存在感が乏しくなったようで、読者数も減っていたことも判りました。パソコン画面で読むことが辛った私は、離れ小島が存在ではなかったことを知り内心で喜びました。広報委員の皆さんも‘老若男女’を問わずに、この決定を歓迎したのを覚えています。

5.表紙

表紙も何回かの大きな変化を経ています。本号の表紙と別稿をご覧下さい。一年単位だった表紙デザインも、月報になぞらえて毎月変えることになりました。内容に相応しい表紙を、と言うご意見もありましたが、それは実現が困難でした。表紙写真は委員全員が複数の作品から絞り込み、最終的に担当委員が決める‘特権’事項でした。

残念ながら写真を選ぶプロセスの前提が崩れて、この特権はいつからか消滅しました。季節感と場所の制約がある環境下で最適な写真を毎月撮り続けることは、実際に至難です。それでも異なる写真が毎号の「顔」になっていること、100%他力本願ですが凄いです。

題字も変わっているのがご覧いただけます。現在の題字は青木麗峰様の書です。一時、無断で使用したことが判り、お詫びを申し上げますと共に継続をお願いしました。ご本人にお会いした時は緊張しましたが、ご快諾下さいました。ついでに、あつかましく縦横いずれも可、としていただいた事を記憶しています。優しい方です。

時の流れ—想い出すままに

1.記念号

1990年2月に「月報20年の歩み」、1994年12月に「JCCI創立25周年」、2000年1月は「30周年」、2006年9月に「日星外交関係樹立40周年」の記念特集を発行しました。表紙の装丁と写真をあれこれと検討したり、特別寄稿をお願いする方のご意向を予め伺うことなく、勝手に依頼先を想定した記憶があります。平素から品行方正な事務局の努力と日本大使館並びにシンガポール政府関係者のご高配をいただき、目指した記念号を発行できました。各々の記念号を読み返すと、シンガポールとJCCIの歩みも写真と共に読む事ができます。記念号の価値を見直す次第です。JCCIオフィスで閲覧できますから、機会がありましたら一度ご覧になって下さい。

2.目がくらむ

月報から少し離れますが、四半世紀ほど昔のことを披露します。日本映画祭が開催され、映画界を代表する女優5名(生田智子、入江若葉、桜田淳子、名取裕子、松坂慶子、敬称略)が来星しました。背景は日星間の政治経済関係は良好に成熟したことを認識された両国政府の意向で、次は文化となったと伺いました。日本文化＝映画女優？なんて難しいことは語らずに、誰もがニコニコしていました。JCCIと日本人会が共催したレセ

クションで双方の若手委員に、女優さんのガードが‘要請’されました。理事の皆様でなかった理由は、親心か要請の意味はすでに予知済みだったか、定かではありません。詳しいことは抜きにして、女優さんたちはさすがに慣れていて、途切れる事が無いカメラフラッシュを全く気にせずに、会場で気軽に会話を交わしていました。私(たち)と言えば、フラッシュ残像で殆ど盲。この催事が成功したことは間違いなかったのですが、若気故にその盛況ぶりも日本文化の美しき代表もしっかりと確かめることはできず、只ただプロの凄さと先達の深い知恵、自分の甘さを再び知った出来事でした。



人気女優来星時の写真(後列一番左が筆者)

3. お叱り

「月報」に繰り返して特別寄稿をして下さっている顔尚強様からでした。JCCI会員のために非常なお骨折りをおしまずにご寄稿下さったにも拘わらず、感想などを会員を代理して伝えなかったためです。広報委員会全員は大変に感謝していましたので、委員長と事務局長にお願いして、その意を顔様に伝えていただきました。ご理解いただき、その後も貴重な歴史的事実、背景を詳しい資料を付けてまとめて下さり、JCCI出版物として刊行することができました。出版に当たり、長く委員会に在籍されている本田千津絵委員と事務局の担当者には、視えないけれども非常なご尽力をいただきましたので、感謝して付記致します。私たちも「月報」の感想や、編集に関する希望などを伺うことができれば、と願います。旨いものは黙って食す日本人の性と、勝手に解釈してはいけませんの

で、宜しくお願い致します。

4. 悦びも

最近になって新たに進出された企業の方から、全く予期しなかった突然の赴任にあたり月報の記事が非常に役立ったことを伺いました。ホームページでバックナンバーを検索され、その方が求めた情報と資料を参考にされたそうです。このようなお話を拝聴したのは初めてでした。JCCIシンガポールと「月報」が日本でも認知されていることを確認できました。何処かでお役にたっていると思うと、嬉しい限りです。

継続に向けて

広報委員は勿論のこと、いつも目立たないけれども非常に有効なサポート役を務めて下さる事務局の皆様も、時と共に変わります。パソコン普及などの技術進化は今後も別の形で起こるでしょうし、情報伝達スピードも更に速くなるにつれて、「月報」はまた媒体を含み変わるでしょう。しかし、創刊から41年以上も変わらない目的と趣旨をこの「月報500号」が改めて記し、今後も引き継がれることを信じます。多少のズレはお許しいただいて、月報存続を願いJCCIシンガポール会員がますますご発展されることを祈念すると共に、「広報委員と月報」に相変わらぬご理解とご支援をお願い致します。

月報表紙写真、内容にみる時代背景、変遷

シンガポール日本商工会議所発足翌年の1970年1月に創刊した月報は、本号で記念すべき500号に達しました。41年半にわたり発行され続けた月報の表紙を改めて見直すと、そこに映し出されたのはこの国の目覚ましい発展と変化の歴史。ガリ版刷りだった創刊号からプリント、デジタル化と月報の変遷も追いながら、月報の表紙や記事を通じて、シンガポールと進出日本企業の時代変化を改めて振り返ります。

【1970年代 商工会議所創立～】



月報創刊号1970年1～2月号

「日本も国際化時代に突入した」と1970年のシンガポール商工会議所(JCCI)月報創刊号で初代会頭が創刊の辞で述べたように、戦後再び日系企業がアジア進出を加速していったのと呼応してJCCIが発足したのはその前年の69年でした。

月報が創刊された当時のシンガポールは、マレーシアから分離独立してわずか5年と、国家としても産声を上げたばかり。月報創刊号に掲載された商工会議所発起人会口誌によると、JCCIの設立許可申請を提出した先は、シンガポール初代内相兼国防相で当時は大蔵大臣だったゴー・ケンスイ大蔵相、そして設立の原則許可を発行したのがシンガポール航空を国際的な航空会社へと育て上げた人物として知られるJ.Y.ピレイ大蔵次官(当時)など、シンガポールの政治や経済の基盤づくりに貢献した人物の名前が並んでいます。



1972年1月号

手書きでガリ版刷りだった月報は71年5月号からはタイプ印刷に変わりました。しかし、決して月報作成作業は楽になったわけではなかったようです。印刷の委託先で活字を拾うのは日本人でなく華人系シンガポール人のために、「え」が「乙」になったり、「う」が「ラ」になったりと、同年5月号に事務局担当者がその当時の校正の苦勞を綴っています。

月報の表紙を飾る写真も96年までは年間を通して同じ写真を使用しており、例えば、創刊年の70年は港湾庁(当時)提供のシンガポール港の写真、翌71年はトアパヨの公団住宅(HDBフラット)と、年毎に写真を交換していました。左の72年の月報は、パヤレバ空港の写真。今や世界的にも名高いチ

ヤンギ空港の影も形もなかった当時のシンガポールの空の窓口はこの空港でした。71年6月号の月報に掲載された記事「シンガポール国際空港拡張計画」には、この先の航空輸送量の増加を見込んで、パヤレバ空港の拡張工事が進められている様子が書かれています。また、73年7月号の掲載記事「シンガポール観光事情」によると、72年の外国人来訪者数は、わずか約100万人。2011年の来訪者数が1,317万人だったの比べると隔世の感があります。シンガポールの観光シンボル、マーライオン像が建てられたのも72年でした。記事では、「シンガポールの観光ブームはたった今始まったところである」と指摘しています。



1977年1月号

また、73年からは月報の写真は、カラーに変わりました。左の77年の月報の表紙を飾ったのはセントンウェイのUICビルディング。ラッフルズプレイス周辺の高層ビル群の先駆けの一つでもあるこのビルが完成したのは73年。翌74年には同通りにホンリョン・ビル、75年にはOCBCセンターと、都心部に次々高層ビルが建てられた時代でもありました。ちなみに、このUICビルディングは12年5月現在、取り壊し中で、ビル再開発のスピードが速く街並みの変化が目覚ましいのも、この国の特徴であります。

【1980年代～】



1981年1月号

80年代には、シンガポールのインフラ基盤となる空港、高速道路、大量高速鉄道(MRT)の建設が急ピッチで進められ、月報の表紙にもその様子が伺えます。

例えば81年1月号の表紙は、完成直前のチャンギ空港の写真。同年の7月にチャンギ空港は開港しました。同年6月号の月報記事「チャンギ空港の新概要」は、空港の建設に多くの日系企業が参加したことや、建設の際には埋め立て用の土砂の不足に加え、労働者の不足などさまざまな問題に直面したのにも係わらず完成に至った苦労話なども紹介しています。



1982年1月号

また、81年には国内最初的高速道路「パン・アイランド・エクスプレスウェイ(PIE)」が完成しました。左の82年1月号の表紙は、完成間もないPIEの写真です。まだ周りには植物も植えられておらず、赤土むき出しの様子がまぶしいほどです。緑化といえば、「ガーデン・シティ」として広く知られるシンガポールですが、84年6月号の記事「Garden City -昨日・今日・明日-」には、緑化にあたって多くの日本人造園家が長期にわたり協力してきたことが紹介されています。



1988年1月号

さらに、MRTの建設は83年から開始されました。81年3月号の月報記事「MRTの推移と現状」では、72年からMRT導入に向けた調査が開始されたものの、採算が見込めないことを理由に建設にゴーサインがなかなかでない状況が説明されていましたが、82年には一転して建設に向けた動きが本格化します。87年11月には南北線の最初の6キロ部分が開通し、その後、段階的に工事が進められていきました。左の88年1月号の月報表紙は、開通したばかりのMRTの写真です。MRTの開通は、MRT駅周辺の再開発を促すと同時に、不動産価格にも影響を及ぼしました。88年6月号の記事「MRT完成後の不動産事情」によると、タンジョン・パガー駅と接続する商業ビル「インターナショナル・プラザ」のオフィス賃料が、MRT開通後には40%上昇したと指摘されています。

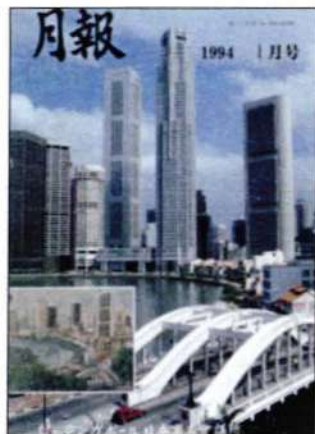
【1990年代～】



1990年2月号

90年には月報が発行20周年を迎えたのを記念して、月報の表紙にそれまで20年間の表紙写真を掲載しています。

90年代には日本でバブルが崩壊する一方で、シンガポールは97年のアジア経済危機で打撃を受けるまで年間平均成長率8.6%と高成長を謳歌しました。進出日系企業数も日本人駐在員の数も経済危機直前にはピークに達しました。



1994年1月号

94年の月報表紙は、金融街ラッフルズプレイス周辺のシンガポール・リバーの写真です。70年代や80年代初期にシンガポールを訪れた人なら覚えていると思われますが、その当時のシンガポール・リバーといえば、今は観光船となっているバムボートであふれ、川はさまざまなゴミと長年蓄積したヘドロのせいか、何とも言えない異臭を放っていたものでした。それが、77年から10年をかけて大規模な川の浄化、美化工事が行われました。この結果、川は以前と比べて大幅にきれいになり、かつてバムボートが運んだ積荷を保管していた倉庫街も新たな飲食街となるなど、川を取り巻く風景も大きく様変わりしました。左の月報表紙の囲み写真には美化前の様子を描いた絵を掲載し、美化工事前と後の川の周辺の様子を対比しています。



1997年1月号

97年には月報の表紙が一変しました。97年1月号の表紙をデザインしたのは、JCCI基金芸術専門コース第1期奨学生だったホー・ライチンさん。タマセック・ポリテクニクの工業デザインの講師であり、工業デザイナーでもあるホーさんは月報のために4種類のデザインを用意し、この年の月報の表紙は四半期ごとにデザインを変えています。99年も同様に、芸術専門コースの第3期奨学生の作品を月報の表紙に採用しています。月報も2000年代に入ると、広報委員が撮影した写真を使って月ごとに工夫を凝らすようになりました。

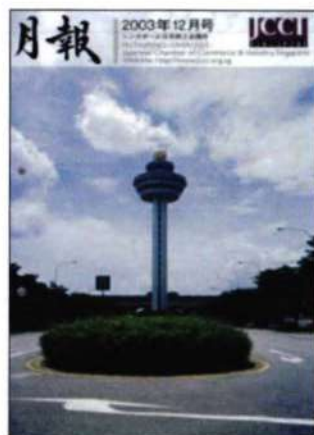
【2000年～現在】



2000年10月号

2000年代のシンガポールは、アジア経済危機の回復から再びITバブルが崩壊し、新型肺炎の流行、その後の経済回復から不動産バブル、そして世界経済危機と、激しい変化の波にさらされました。国内では都心部のマリーナ・ベイを中心に新たな再開発が進んだ結果、風景が大きく変化しました。月報の写真からもカジノや大観覧車など大型プロジェクトが完成していく様子を見ることができます。

00年10月号の月報写真は当時のマリーナ・ベイを撮影した写真ですが、現在マリーナ・ベイ・ファイナンシャル・センターが建つ場所は緑地のままだったほか、川を堰き止めるマリーナ・ベイ・バレーージュも建設されていないため、船が自由に航行している様子が記録されています。



2003年12月号

04年に月報もデジタル化へと舵を切りました。04年1月号から紙媒体での月報の発行は一時停止となり、ウェブのみの発行となりました。紙の月報発行の最後となった03年12月号は、チャンギ空港前のロータリーを撮影したものです。実は振り返り地点に立った月報を象徴すると同時に、紙媒体での月報の復活を願った当時の広報委員のひそかな思いを反映したものでした。その思いがかなったのか、06年4月からは紙媒体の月報が復活します。

一方、03年には新型肺炎が流行して感染死亡者がでたほか、観光客の激減など国内経済も大きな打撃を受けました。月報でも、04年6月号に新型肺炎や鳥インフルエンザ流行に対する企業の危機管理の方法などの情報を掲載しました。



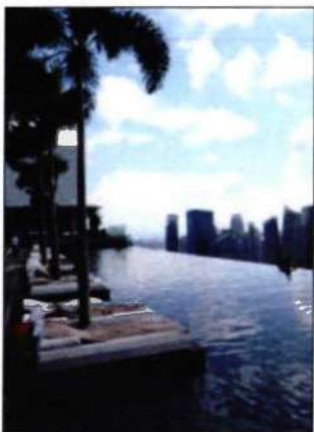
2007年8月号



2010年6月号



1971年1月号



2011年5月号

また、00年代の大きなニュースといえば独立以来禁止していたカジノの解禁です。リー・シェンロン首相は05年4月、国内2カ所にカジノを敷設した総合リゾート(IR)を開発すると発表しました。その結果、IRの建設地となったマリーナ・ベイとセントーサ島を取り巻く風景は大きく変わっていきますが、その変化の様子を撮影した1枚が07年8月号の月報の表紙です。建設中だった大観覧車のシンガポール・フライヤーからマリーナ・ベイを撮影したのですが、対岸に建設が始まったばかりのマリーナ・ベイ・サンズが見えます。

さらに、00年代には外国人移民の増加によって人口も急増し、それに伴い国民の住環境も大きく変化しています。国民の8割以上が住む公団住宅(HDBフラット)は、住宅供給を確保していくためにも高層化しており、左の10年6月号の写真は国内最高層の50階建てHDBフラット、ザ・ピナクル@ダクストンです。月報の表紙を見返すと、71年の月報の表紙は当時のトアパヨのHDBフラット群の写真ですが、ザ・ピナクルと比べると住環境の変化がよくわかります。翌72年11月号に掲載されたHDBフラットの開発を管轄する住宅開発庁(HDB)の寄稿記事には、当時はまだあったという「スラム」を一掃してその住民に住宅を供給していく必要が述べられていました。それが、今や公団住宅が高級コンドミニウムと間違えるような50階建てザ・ピナクルへと変貌を遂げ、40年を経て豊かになったシンガポールを象徴しているようです。

10年にはセントーサ島とマリーナ・ベイの2つのIRが相次いでオープンし、両IRは世界中から多く観光客を集めることに成功しています。月報11年5月号の写真は、マリーナ・ベイ・サンズの屋上プールで日光浴を楽しむ観光客の姿を映したものです。

70年に「新たな国際化時代に突入した」との意気込みをもって創刊した月報ですが、41年後のシンガポールは再びアジアに新たな活路を求める日系企業から新たな注目を集めています。月報はこれからも1,000号に向けて、変貌し続けるシンガポール、そして当地でビジネスを展開する日系企業の姿を記録していく月報であり続けたいと願っています。

執筆：広報委員会 本田 智津絵
(JETRO SINGAPORE)

シンガポール日本商工会議所発足の半年後、1970年1月に発刊された月報。

500号を記念し、創刊号の一部を掲載いたします。



月報創刊
1970:1-2月号

＝ 目 次 ＝

巻頭之辞 佐藤周輔氏 (会頭) ... 1

国際化時代 奈良靖彦氏 (大使) ... 4

SJJCが出来るまで 発起人会日誌より 5

事務局より 8

理事会承認、月例会、雑件

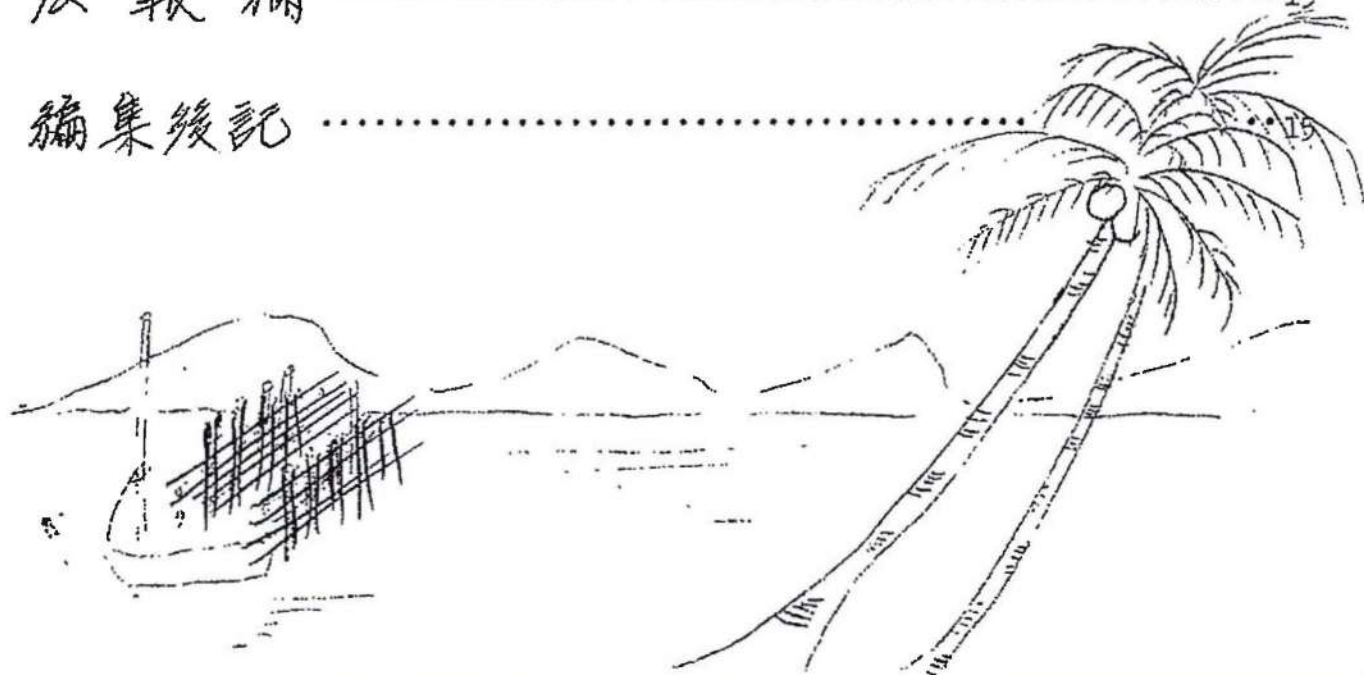
部会により 11

金屋部会、金融保険部会

現地の声 立花氏 (時事通信) ... 14

広報欄 15

編集後記 15



三 卷 頭 之 辞

シンガポール日本商工会議所も吼々の聲を挙げて
早々辛酉年、今般月報創刊号発行に当りその巻頭を
撰させて頂ける事は小生に執つて無上の光栄と思います。
この機会をかりて“1970年代初頭に当り思いつく
儘に所感を申述べさせて頂き度いと思います。

昭和45年1月20日

シンガポール日本商工会議所
会 頭 佐藤 周輔

大分弁になりますか、或人が神様は不公平だと嘆
いていました。『日本人はこの様に勤勉なのに小さな
国土に押込められて効けど効けど貧乏している。それ
なのにオーストラリア人は日本の10分の1の人口で20数倍
の土地を余してノビリー一生を送っている。GNP Per
Capita 3/4000 米等の国もあれば、数十米等の国もあ
る。生まれると直ぐ砲聲の中で育ちやがて青春も
Enjoy 出来ず流れ弾に当って死んでいく国の人達も
ある』と……。

ヨーロッパを旅行して見るとついこの間迄七つの海
を支配していた大英帝国、ナポレオンの佛蘭西を始め
伊太利も独逸もそしてスペインもポルトガルもオラン
ジも果てはスウェーデン、ノルウェーに致る迄何時の時
代か多かれ少なかれ世界を支配した歴史がある事

をひしひしと思い出させます。

我々の子供の頃の日本は平和であったが、ホニの一部の人達を除いては誠にミゲメで貧乏でした。それに輸を掛けたのが大東亜戦争です。昭和20年、世界数十ヶ国を相手に戦った日本帝国は遂に力折れ矢盡き荒廢に帰した国土に全面降服した時、日本の製鉄設備は4/50万噸、綿紡も又数十万錠、そして都会に生活していた我々は豚の餌同様の食物で僅に飢えを忍び、ローソクの炎の下で嗚呼 もうこれでお終いかと考える余裕すら失っていたのか、つい昨日の様が気がします。

その日本が何時の間にか鉄鋼、造船、自動車、化学、繊維工業等殆んど分野で世界の1/3位を争う様になった事は正に世紀の奇蹟と申すべきでしょう。

何れにせよ嘗て長い歴史の中に世界の多くの国々が然る可き時と人を得、その努力に従って大なり小なり当時の世界を支配し得たとするなら、今や日本にもその chance が廻って来つゝある、即ち神様は必ずしも不公平では無いという証拠になりそうです。

而し翻って日本の経済を見直した時成程幾つかのものは米、ソに次ぐ世界才三位と云うことになっているにしても全般的に見ると内容と balance に於て小々夫米国のそれとは雲泥の差があるのではないのでしょうか？

例えば身近な例では日本では車はあっても住居

もガレーゲもなかったり、素晴らしい国道は出来ても大方は
ゴミゴミ ガタガタの小路が多かったり、機械にしてもまだ
まだ米国には敵わないものが多く更に米国では Apollo が
月を征服したのに日本ではまだ玩具同様の小型無人
ロケットの打上げすら成功していないといった処です。

1970年代の日本はこの unbalance が全済内容を充実
是正 真に世界の一位を確保出来るか堂々の重大な試
練の Decade です。かくて日本の全済は 世界全済との連
帯性が飛躍的に高まり一躍に国際化時代に突入した
と申せましょう。

国際化に入った日本は従来の殻を打破った新たな
針路を見出すねばならないと思います。

先づ日本は従来の欧米依存を是正しなければならな
いと思います。日本は如可に モガコラ とアジアに在り、日
本人はアジア人である。日本はアジアあつての日本であ
る。我國の政策も全済も総てアジアオーシェン主義であり
アジア重奥主義でなければならぬ。そして日本は好
むと好まざるに不拘ずアジアの政情と全済に責任
を持つたねばならぬ。そしてその基盤に立ってこそ日本は世
界の仲間入りか出来るのでは無いでしょうか。

我々は辛い今シンガポールに居ます。この国の人々と深
く溶け合つて何かしかでもこの国の繁栄に寄与すること
をして行きたいと思う気持は 皆一諸だと思ひます。

このシンガポール日本商工会議所も半歳を迎へました。
我々はいさゝかこの組織を活用して崇高な理念と使命
感の下に この国の繁栄を祈りそして日本人がシンガポール
共和国を始めアジアの諸国の人達から真に愛される民
族になりたいものだと思ひます。 (完)

国際化時代

名譽顧問

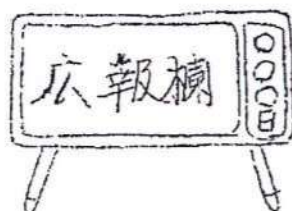
奈良靖彦

大国が後進国に投資する場合、必要以上に被投資国にギラギラした印象を与えるようだ。そのために日本や米国の努力がその国の発展に寄与しているにもかかわらず、喜ばれない例がある。これを防ぐためには、次の方法があると思う。

①は当該国の人をできるだけ登用することである。自分が感心した例はアメリカでも有数の大銀行である First National City Bank が当地の支店長に今年30才になる Wang 氏を抜てきしたことである。残念ながら日本では語学の関係でそこまで望むのは現段階では難しい。しかし心して我々もそのような方法に持つてゆかずばなまい。

②の緩和策は合併にしても規模が大きければ大きい程、以上の国の参加が望ましい。そうすることにより、国の横暴という説を防止できる。

いずれにせよ、わが国もますます国際化時代に入ってきたのであるから、日本だけですべてをやつてゆくという従来の方針を改めるべき時期にきているのではあるまいか。



I 事務所変更

GM-04 TOKYO/CHUNICHI

334 K, CLEMENCEAU AVENUE S'PORE 9.

TEL: 20748.

II 社名変更

NO 55 SEKISUI MALAYSIA CO., LTD. は SEKISUI SINGAPORE (PTE). と変わりました。

NO 72 KAJIMA CONSTRUCTION は KAJIMA CORPORATION に変わりました。

III 代表者交替

NO 38 UNITIKA LTD MR.Y.MATSUMOTO は MR.N.KAMIKUBO と交替になりました。

NO 40 NIPPON GAKKI CO., LTD MR. Y.SATO は MR.T.FUKAYA と交替になりました。

NO 51 FUJI ENGINEERING CO., (S) PTE.LTD. MR. T.KAWAMURA は
MR.Y.KAMITAKEHARA と交替になりました。



昨年の末、着任まもない萩原日本航空支店長をくわいて広報委員を引当けていただき、ようやく月報創号が離陸しました。

名誉顧問奈良大使の御寄稿と、佐藤会頭の巻頭文をもってスタートを切りましたが、これから皆さんの積極的な御支持により、ますます高度をとり、社内サービスも充実させたいと考えております。

会員各位の御寄稿と、本誌に関する御指導とを期待しております。

月報創刊時の思い出

シンガポール日本商工会議所

1970年当時初代広報委員長（当時 日本航空シンガポール支店長）

荻原 雄二郎



先日、シンガポール商工会議所の石野様からJCCI機関紙への寄稿を依頼されびっくり致しました。この依頼状によれば、私が初代広報委員長であったとのことですが、恥ずかしながらも40年以上前のことですので、そのような大役をお引き受けたことやどんな活動をしたかの記憶が殆ど欠落しており、お役に立たないのではないかと戸惑うばかりでした。しかしながら、現在の日本航空広報部長の溝ノ上正充君（前日本航空シンガポール支店長、前JCCI広報委員長）の強い要請もあり、且つ広報活動ばかりでなく当時の社会情勢の推移でも結構とのことでしたので、止む無くお引き受けすることと致しました。

私が日本航空の第5代目支店長としてシンガポールに赴任したのは昭和44年9月、43歳の時でした。当時の日航支店内は労使関係の悪化により大混乱の最中でした。赴任後1か月もたたない中に突然のストライキの通告を受けびっくり致しました。その理由については明確な説明はありませんでしたが、支店運営について全般的に民主的でなく、高圧的であるというような主旨でありました。そこで派遣員管理職や現地係長クラスの意見を聴取することとしました。当時のシンガポールには未だわが国の中国内濾器部への侵略やシンガポール陥落に伴う民衆の反日感情が強く残っていたように思われます。血債の塔にまつわる対立もその証拠ではないかと思われます。また一方、派遣員管理職の中にも現地員に対してかなり優越的な態度を取り反感を招くものも存在していたことは否めない状態でありました。そういう

労使関係の改善のため取った対策は、第一に現地職員を蔑視しがちな派遣管理職を帰国させて、現地員に友好的対応を期待できる空港勤務の管理職を派遣して貰うことでした。また一方、市内営業所内の有能にして友好的な現地一般職を思い切って支店次長やセクションマネージャーに登用し配下の現地職員を指導して貰うことにしました。この労務政策は徐々に効果を発揮するようになり、支店内の労使関係は穏健な方向を辿るようになりました。

このような考え方は当時の奈良靖彦大使が月報創刊号にも寄稿されているように「国際化時代」を迎えて「当該国の人をできるだけ登用することである。アメリカの有数の大銀行であるFirst National City Bankが当地の支店長に今年30歳になるMr.Wongを抜擢したこと」は特筆に値することであると述べられておりましたが、小生も現地員登用方針にはかねてから賛成であり、城内支店においても空港支店においてもこの労務人事政策は大きな成功をおさめることができました。

しかしこの現地員登用政策だけでは問題は解決しませんでした。当時日本から来られるお客様は日を追って増加の一途を辿りましたが、空港に勤務する派遣員は当時の当局の方針によりすべて整備・運行部門に限定されており、直接空港においてお客様に対応できる日本人社員は皆無と行ってよい状態でした。そのため、支店長自らが少なくとも週二日は空港勤務に集中し、赤ん坊連れの奥様を機側(?)にお迎えしてイミグレーションや通関のお世話をしなければなりません。ご存知のように現在のような世界第一級の

チャンギ空港と違って当時のパヤレバ空港は未だ整備が貧弱で、航空機から下りられたお客様は支店長自らが機側でお迎えし、お子様を抱えてランプを通り抜け、壁にかかったマイクロフォンを取って「〇〇会社の山本さん、今ご家族がお着きになりました。こちらまでお越しく下さい」というような原始的な対応を取らざるを得ませんでした。そこで考えた方策は第一に当時日本航空の本社で採用されていた社歴2、3年の若い学卒社員を派遣して貰って、現地セクションマネージャーの下で働いて貰うという海外実習派遣員方式でした。この方式は空港支店の労使関係にも何ら問題を引き起こすことなくうまく機能して日本人のお客様によりよいサービスを提供することが出来るようになりました。

ところが当時は日本人のお客様が増加の一途を辿るばかりでやがて実習派遣員1名では到底足りないという状況に至ることとなり、この制度に加えて日本において日本語を勉強し、日本において会社勤務を経験した若い職員を採用しこれに多少の日本語手当を支給する制度を導入し増大する日本人お客様のお世話に当たらせました。

ところがこのことが組合からの猛烈な反対を受けるに至りました。組合の主張はこのような手当を支払うならば、北京語、香港語、潮州語を話す現地職員にもそれぞれの語学手当を支払えと主張し労使間の対話では解決しない段階にまでエスカレートしました。そのため、組合は裁判所に訴え法廷手段にまでもつれ込みました。この裁判では私自身も直接法廷の場に立たされ、下手な英語で渡り合わなければなりませんでした。その結果は幸いにも会社側が全面的に勝訴することとなり、安心致しました。この判決が下ってから組合は急速に穏便化し、社内体制は一挙に安定化に向かいました。

ところがその時期は明確に覚えておりませんが、その頃新しいチャンギ空港に至る高速道路の建設に従事していた日本人の奥様がシンガポールに来られ、ご主人と一緒に生活することになりましたが、不幸にもこの奥様は日ならずして中国系メイドに殺害されるという事件が起きました。誠

に痛ましいことでありました。司法当局はこの問題の早期解決を急いだ模様で、このメイドは短期間のうちに死刑に処せられました。今思うと我が国とシンガポールとの間には戦後20年を経ても消えきれない民族間対立関係が残っていたのでしょうか。このような不幸な事件もありましたが、今考えると総じて私がシンガポールで過ごした後半の時代は労使関係の安定が得られたことにより最も楽しい時代であったと感謝せざるにおられません。一日の空港勤務を終えてパヤレバ空港を飛び立った日航機が夕日の中に椰子の葉陰を超えてジャカルタ空港に向かって消えてゆく姿を目で追いながら言いようのない幸福感に浸った思い出は今なお消えることはありません。

JCCI現役の

広報委員よりメッセージ集

「月報500号記念」に寄せて 広報委員会委員2012

委員長	河原畑 敏幸	JAPAN AIRLINES CO LTD
幹事長	中島 茂	NTA TRAVEL (SINGAPORE) PTE LTD
委員	津田 律子	DREW & NAPIER LLC
委員	川岸 貴浩	ERNST & YOUNG
委員	梶山 宗嗣	FUJI OIL (S) PTE LTD
委員	三宅 康雄	HAKUHODO COMMUNICATIONS ASIA PTE LTD
委員	大友 一成	HITACHI ASIA LTD
委員	神谷 智宏	ISETAN (SINGAPORE) LTD
委員	川浪 弘太郎	ITOCHU SINGAPORE PTE LTD
委員	本田 智津絵	JETRO SINGAPORE REPRESENTATIVE OFFICE
委員	高橋 哲	KAJIMA OVERSEAS ASIA PTE LTD
委員	長村 俊明	KDDI SINGAPORE PTE LTD
委員	國井 大輔	MITSUBISHI CHEMICAL SINGAPORE PTE LTD
委員	東間 譲	MITSUBISHI LOGISTICS SINGAPORE PTE LTD
委員	門田 大輔	MITSUMI FUDOSAN (ASIA) PTE LTD
委員	今枝 弥史	MITSUMI ELECTRONICS (S) PTE LTD
委員	土屋 浩司	PANASONIC ASIA PACIFIC PTE LTD
委員	竹腰 雄二	THE BANK OF TOKYO-MITSUBISHI, UFJ LTD
委員	中村 綾子	THE TOKIO MARINE & FIRE INSURANCE CO (S) PTE LTD
委員	足立 基成	JNTO SINGAPORE OFFICE
オブザーバー	門伝 好司	JIM & HALL'S PTE LTD

(敬称略、会社名アルファベット順)
2012年7月現在

DREW & NAPIER LLC

津田 律子

創刊500号、おめでとうございます。

私が広報委員になったのは、シンガポール日本商工会議所(JCCI)からお声掛けいただいた事がきっかけでした。「月報」は毎月手にしていましたが、それがどのようなプロセスで作られているのかをまったく知らなかったため、その興味に突き動かされるかたちで、広報委員をお受けしました。しかし大いなる興味はあっても、広報委員としての活動自体を十分に理解しないまま飛び込んでしまったため、当初は、月次委員会で先輩委員の討議についていくだけでも大変なことでした。

私の広報委員としての活動は今年で4年になりますが、日々のビジネスが驚異的なペースで進むシンガポールで、時宜を得たテーマを選定し、ご執筆いただけそうな方々にアプローチをかけ、企画案をまとめ、委員会で発表し承認してもらうという一連の流れは、簡単なようでなかなか骨の折れる仕事です。また、これらをタイトなタイムラインの中で進めていかねばならないことも、常に大きなプレッシャーです。

このように、いまだ悪戦苦闘と試行錯誤を繰り返しながらの活動ではありますが、1970年から続く「月報」の42年という長い歴史を思うとき、その一ページにささやかながらも貢献できることは、実に光栄なことだと実感せずにはいられません。間もなく独立47周年を迎えるシンガポールですが、その歴史に寄り添うように、各時代のシンガポールの旬な話題や諸情勢を「日本人の観点」から記録し続けているのが、この「月報」なのではないでしょうか。その重要な意味を再認識すると共に、シンガポールを基点にビジネスを展開するJCCI会員の皆様に、有益かつタイムリーな情報をお届けできるよう、広報委員のひとりとしてこれからも精一杯の努力をしていく所存です。末筆ながら、お忙しいビジネスの合間を縫ってこれまでご寄稿下さった皆様、そしてこれからご寄稿くださる皆様に、この場をお借りして心からお礼申し上げます。

FUJI OIL(S) PTE LTD

梶山 宗嗣

500号発刊おめでとうございます。1970年の創刊以来、実に40年以上というこの歴史は、今なお発展を続けるシンガポールにおいて、日系企業が昔から如何に深く関わって来たかを物語っているように思います。

この月報500号と言う節目に広報委員として編集作業に携われた事を光栄に思う次第です。今でこそ、シンガポールの情報もインターネット等で手軽に入手出来るようになってはいますが、これらの無い時代から、シンガポールの最新情報を“日本語で”提供してきた事は、この月報の大きな功績のひとつではないでしょうか。

また、一線で活躍されている方々が執筆されているこの月報は、情報の新鮮さ、正確さの面で、インターネットの普及した現在においても、貴重な情報源になっているのではと思います。

これから先、いよいよアジアの時代となり、アジアの一員としての日系企業の果たす役割もますます大きくなっていきます。それを支えると言うのは大袈裟過ぎますが、少しでも質の高い情報を提供し、お役に立てて頂けるよう、また次の1000号に向かって、微力ながらも尽力したいと思います。

HAKUHODO COMMUNICATIONS ASIA PTE LTD

三宅 康雄

創刊500号おめでとうございます。

第1号の発刊が1970年1・2月合併号、とのことで、もう40年以上前になりますね。日本は昭和45年、大阪万博の年、ビートルズのLet It Beが発売された年、テレビでは“モーレツからビューティフルへ”のCMが流れた時代です。(私は小学生でした)

シンガポールの1970年は、独立からまだ5年の若い国で、当時の人口が200万人程度だったそうです。マレーシア・シンガポール航空はまだ分離前、成田空港もチャンギ空港も開港していなかったのですね。その頃の月報(手書き原稿とのこと)は、JCCI事務局で閲覧できるそうで、当時の状況がわかる貴重な情報を私もぜひ一度読みに行こうと思います。

私自身は、4年前の赴任以前は、正直に申せばシンガポールという国が特に身近だった訳ではありません。アジアのハブ都市としてのエネルギー、ダイナミズムを実感し、またシンガポールと日本の深く強い絆・交流を知るにつけ、今この地に暮らし、仕事をする機会に恵まれていることにありがたいと感じる昨今です。

月報編集担当の一人としては、いつか次の方にバトンを渡すときまで、会員の皆様に役立つ、また長く残るテーマをお届けし続けられるよう、微力ですが尽くしたいと思います。

ITOCHU SINGAPORE PTE LTD

川浪 弘太郎

記念すべき創刊500号、おめでとうございます。

聞くところによるとJCCI発足が1969年、月報第一号の発刊が1970年との由にて、斯くも長きに亘りJCCIの活動が続いていることに驚くとともに、諸先輩委員方には改めて感謝を申し上げる次第です。

日本に於いて1970年と言えば、高度経済成長が収束しつつあった頃であり、当時と比較して日本を含む世界の状況は大きく変化しております。現代に於いて40年は、一国を変えるには十分過ぎる時間ではありますが、特に、国土が小さく、人口が少なく、歴史の浅いシンガポールについては、当時から今日までその変化は、極めて早く、大きなものだったのではないかと想像されます。

その様な中、日々激動の変化を見せるシンガポールという国について、1965年の独立、即ち『国産み』の直後から、毎月発刊されているこの月報は、外国人(=日本人)という第三者の視点による定点観測として、大変貴重、且つ有意義な資料ではないかと思う次第です。

今後もJCCIの月報が何十年も続いていき、『シンガポールについて知りたければJCCIの月報を読め』と周知される様になることを、お祈りしております。

KDDI SINGAPORE PTE LTD**長村 俊明**

昨年10月より広報委員を前任者から引き継ぎまして、10ヶ月を迎えます。500号という長い歴史の中で私が携わることが出来たのは、ほんの一瞬でしかありませんが、このような記念すべき瞬間に広報委員の一人として微力ながら活動する機会を得られたことを大変うれしく思います。

こちらに赴任して最初の業務が広報委員会への出席でしたので、その時の印象は今でもはっきりと覚えております。委員の皆様とご挨拶をさせて頂く中で、話題の豊富さと深さに驚くと共に私も委員の一人として少しでも月報編集に貢献できるよう、様々な事に興味を持ち、情報収集に努めていかなくてはならないと気持ちを新たにしました次第です。

JETROの本田様と一緒に担当をさせて頂きました月報3月号編集を通して、多くの方々のご支援により月報の製作が行われていることを実感し、発行後は多数の方のご意見やご感想にふれ、月報の重みを再認識致しました。次回担当の際にも執筆のご協力をお願いさせていただく事もあるかと存じますが、精一杯サポートして参る所存でございます。今後ともご支援賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

シンガポールで生活しておりますと、日本のブランドや文化及び言語が広く浸透していると感じることが多々あり、出張者から驚きの声を聞く場面もございます。このような現在の環境の影にはJCCIに関わる皆様方の多大なるご努力があった事とお察し致します。月報が更なる日系企業の活躍の為に有益な情報提供できるよう、引き続き委員会としての活動に取り組んで参る所存でございます。

MITSUBISHI CHEMICAL SINGAPORE PTE LTD**國井 大輔**

月報500号という節目に広報委員という立場でこうしてコメントが出来ることを光栄に思います。と言っても私自身はまだ来星2ヶ月、広報委員という大役を引き継いだのも2ヶ月であり、まだ何の役にもたっていない状況ですので、諸先輩を前に甚だ気が引ける思いも正直あります。

前任から引継ぎを受けた際に、初めて過去の月報をいくつか読ませて頂き、そのテーマの幅の広さ、内容の深さに感動し、思わず読みふけてしまったことを思い出します。ガイドブックやインターネットでは得られないシンガポールに関する情報が多岐に亘り掲載されており、シンガポール初心者の中には非常に良い情報ソースとなりました。(さすがに500冊全ては読めませんでしたが)

今後は私自身がその特集記事の企画・編集等その一翼を担うことになる考えると非常に重責ではありますが、普段自分が感じている問題意識や疑問を他の広報委員の方へ披露し、皆さんと相談しながら企画・編集作業を進め、最終的には読者の方に少しでも有益な情報を提供出来る様努めていきたいと考えております。

MITSUBISHI LOGISTICS SINGAPORE PTE LTD

東間 譲

1970年1月より42年以上の長きに渡り 情報を発信し続けた、JCCI広報委員会の月報がこの度、創刊500号を迎えることになりました。経済の発展が著しく、国際情報社会において東南アジアの最先端であるシンガポールでご活躍されている会員の皆様も、常に新しい情報を求め、更なる発展を目指していらっしゃるものと存じます。

今回、500号記念として、月報第1号の記事が 掲載されています。記事の内容だけでなく、ワープロやパソコンのない時代に手作りで発行された創刊号を通じ、日本企業がシンガポールで築いてきた歴史を振り返り、日常生活ではあまり気にすることの無い、今日のシンガポールにおける日本企業の発展の起源を振り返ることが出来るのではないのでしょうか。

500号という記念すべき時に、広報委員会の一員となれたことは光栄であり、会員の皆さんに読んでいただいておりますお役に立てるような情報を広報委員会のメンバーと一緒にご提供できれば幸甚です。

MITSUI FUDOSAN(ASIA) PTE LTD

門田 大輔

創刊500号おめでとうございます。当地に赴任し2年が経ちますが赴任したばかりの頃の戸惑いを今でもはっきりと覚えています。私はシンガポール赴任直前、アメリカに研修生として半年滞在し、そのままシンガポールにやってきました。赴任前には東南アジアには来た事がなく、シンガポールについての知識も「なんか繁栄してそうな国」位しか無いまま赴任いたしました。英語もよく理解できずに困惑する毎日でしたが、生活、ビジネスに必要な情報を「月報」から色々と教えていただき、また現在も、広報委員ではありますが、一読者として毎号楽しみにしております。執筆者を探すのは、正直毎回大変ですし、また自ら執筆させていただいた時も、仕事の忙しい時期と重なり、とても大変だったなと記憶しておりますが、自分が書いた原稿を読んで下さった初対面の方から深夜のバーで、

「あなたがあの原稿書いた門田さんですか。あの記事は大変参考になりました」と言われた時には、「眠い目を擦りながら書いた甲斐があったな」と嬉しく思いました。

業務多忙にも関わらず執筆を引き受けてくださる方々にはとても感謝しております。500号という事は、本当に大勢の執筆者の方々が「月報」を支えてきたのだなと改めて思います。この場を借りてお礼を申し上げます。

今後も、異国の地で頑張っている方々に有益な情報を届けるべく、アンテナを高く張って、「月報」の更なる充実に貢献できればと考えております。

THE TOKIO MARINE & FIRE INSURANCE CO(S) PTE LTD

中村 綾子

月報500号記念号の発行に、広報委員として参画させて頂けることを大変光栄に思うとともに、諸先輩方・会員の皆様が培われたきた歴史の重みを実感し、身の引き締まる思いであります。

私が2010年7月に赴任する直前に、スイスのビジネススクールIMDが「2010年度世界競争力年鑑」を発表し、シンガポールが1位にランキングされました。来星して、街に溢れる活気・躍動感から、経済危機からの目覚しい回復を肌で感じ、それを実現させているのが、「世界一」に輝いた競争力であること、そして、競争力を発揮するために、シンガポールが先を見据えながら変革のための絶え間ない努力を続けてきたことを学びました。500冊の「月報」は、まさにシンガポールの変革・成長の軌跡、ともに歩んできたJCCI・日系企業の歴史とともにある、と言えるのではないのでしょうか。

今後も、ますます速いスピードで変化する状況において、「今」「先」を映すような、タイムリーで有益な情報をお届けできるよう、広報委員の一員として微力ながら全力で取り組んで参りたいと存じます。

ISETAN SINGAPORE LIMITED

神谷 智宏

創刊500号おめでとう御座います。

月報第一号創刊が1970年との事、42年以上各界の情報をシンガポール日本企業及び関連企業関係者に提供し続けている事に改めて驚きと敬意を感じます。

何に一番驚きを感じるかと申しますと基本的に広報委員会の活動、月報記事準備が各日本企業から集まった広報委員、すなわちボランティア活動で成り立ってきたという事です。

私は2009年4月よりJCCI広報委員会委員を担当させていただいて下りますが、正直最初は、“JCCI？何の略？”“広報委員会？何について？”と恥ずかしながら、全く存在・活動内容など知りませんでした。現在は月一回行われている広報委員会会議において各委員から発表される奥深い様々な記事に接し、自己啓発させていただいて下ります。

一方“記事ネタ”探しは容易ではなく、常に頭を悩ませてくれますが、“これこそ広報委員会の醍醐味”とポジティブに捉え、楽しむよう心掛けて下ります。

創刊500号とは記事ネタ探しの歴史・通過点であり、今後1,000号、2,000号と広報委員の記事ネタへのあくなき探究心と好奇心が限りなく続く事を心より期待し、お祝いの言葉と変えさせていただきます。

JETRO SINGAPORE REPRESENTATIVE OFFICE

本田 智津絵

創刊500号おめでとうございます。手書きガリ版刷りだった1970年の創刊から42年にわたり発行し続けた月報は、当地における日系ビジネス活動の貴重な記録でもあります。この記念すべき創刊500号記念号の一端に係われたことを非常に光栄に思います。

広報委員は、毎月発行の月報の編集担当として5本程度の掲載記事のテーマを考え、執筆者を探すという作業が1年に一度回ってきます。それぞれの委員が日々忙しい業務の中で、テーマを考えると同時に、執筆を快く引き受けて頂く方を探すのはなかなか大変な作業であり、それは手書きガリ版刷りだった時代とその手作り感覚はあまり変わってはいないのではないのでしょうか。そして、その手作り感がかえって、当地でビジネスに携わる方々のその時々を経済環境やビジネス上の課題を示す生きいきとした貴重な記録でもあり、他ではなかなか見られないユニークな雑誌となっているように思います。

この次は月報1,000号を目指して、シンガポールのその時々のある益で、新鮮なビジネス情報を届け続けることができるよう、広報委員会の一メンバーとして尽力していければ幸いです。

ERNST & YOUNG

川岸 貴浩

月報500号という記念すべき発行に、広報委員としてコメント出来る機会を頂き、大変光栄に感じております。昨年の8月に前任からの引継ぎの一環として、広報委員会に参加した際には、シンガポールの知識がほぼゼロに等しいこともあり、広報委員の方々の議論の内容の深さに衝撃を受け、自分がこの場にいて良いのかと真剣に悩んだこともありました。

緊張の委員会が数回続いた後、年末に広報委員の忘年会企画があり、酒席で色々な方とざくばらんに話をさせて頂いたときに、それぞれがシンガポールで同じような苦労を経験し、その中でもシンガポールに興味を持たれて、シンガポールライフをエンジョイされていることが分かり、ぐっと距離が縮まった様な気がしました。それ以降は、広報委員会に参加することが楽しみになり、様々な業種の方との交流に積極的になることが出来ました。

僭越ながら、妻が12月号で寄稿する機会を頂き、数名のクライアントの方から、「あの津軽海峡冬景色が好きな人は川岸さんの奥さんですね。」と声をかけて頂き、「月報」の反響の大きさに驚かされてしまいました。

今後も、広報委員の活動を通じて、シンガポールの日系企業の方々に興味深く、有益な情報を発信するお手伝い出来る様、微力ながら貢献して行きたいと思います。

KAJIMA OVERSEAS ASIA PTE LTD

高橋 哲

月報創刊500号誠におめでとうございます。編集員の一人として大変喜ばしく思います。私が編集委員をさせて頂きましたのは2000年の6月からですから早いもので12年が経過しました。その間だけでもシンガポールは大きく変わりました。2003年にはSARSやイラク戦争勃発で観光客が激減。ホテルは閑古鳥が鳴いていたのを良く憶えています。2007年には2つのIR、インテグレイテッド・リゾートが建設され、また同時に起こった古いコンドミニアムのオンブロックセール、そして解体新築ラッシュで、シンガポールの建設投資は大きく伸び、どこへ行っても工事現場という状況でした。

マリーナベイでは再開発による巨大ホテル、カジノ、コンベンションセンター、オフィスビルが建設され、まさにスカイラインが大きく変貌を遂げました。

月報には毎号意味のある、そして読み応えのある記事が寄稿されています。これは編集員が汗をかくて集めてきた賜物ですが、寄稿して頂く多くの人に支えられています。これからも編集員の一人として、月報づくりに貢献していきたいと思います。

PANASONIC ASIA PACIFIC PTE LTD

土屋 浩司

JCCI月報創刊500号大変おめでとうございます。昨年10月に来星し前任者から広報委員という大役を引き継ぎましたが域内出張が多いため毎月の広報委員会にほとんど参加できておらず、まだ何の役にも立てていない中で諸先輩にコメントするのは甚だ気が引ける思いです。

1970年の発刊以来40年以上にわたり月報を発刊されてこられた諸先輩方には改めて感謝申し上げる次第です。これまで欧米を中心に駐在生活をおくってきた弊員にとり、初めてのアジアであるシンガポール駐在となり赴任前よりアジア域内やシンガポールについて全く知識も無い中で非常に不安な毎日でした。

その時前任者から引継資料とともにあった過去の月報をすべて読ませて頂き、シンガポールで活躍されている日系企業の方々の関心ポイントについて幅広いテーマで深い内容の記事が掲載されており、非常に勉強になりました。

インターネットでも決して得ることのできないインフォーマティブな情報ソースだと思います。アジアのハブとして益々ダイナミックかつエネルギーに発展するシンガポールはあらゆる面で非常に魅力的な国であり、この地で生活をすると共に広報委員会の皆様と今後も月報を作成していく機会に恵まれたことに感謝したいと思います。今後とも月報が日系企業の皆様にインフォーマティブな情報提供ができるよう、委員会の一員としての微力ながら尽力したいと思います。

MITSUMI ELECTRONICS (S) PTE LTD

今枝 弥史

シンガポールJCCI月報創刊500号の発刊おめでとうございます。

このような素晴らしいタイミングに、広報委員という大役を務めさせていただけることは大変に光栄なことであり、これまで月報の編集にご努力されてきた諸先輩方のご苦勞に敬意を表します。

月報発刊の歴史的経緯を振り返るとき、1965年8月9日のシンガポール共和国の独立、その4年後の1969年7月にJCCIが設立され、1970年1月には記念すべき月報第一号(1.2月合併号)が発刊されました。以来42年間の長きに亘り、500号発刊の今日までの歴史は、まさにシンガポール建国とともに歩み続けた偉大な事業と言えるでしょう。現在JCCIの会員数は743企業(2012年4月現在)、設立の目的である日星間の経済交流促進、シンガポールにおける日本企業の発展寄与、会員相互の交流親睦の実現に邁進し、これからもシンガポール共和国の繁栄と、日本企業の発展に貢献することが期待されています。

私はシンガポールを起点に、東南アジア諸国とのビジネスに携わっておりますが、周辺諸国の発展に比べて、シンガポールの興隆は群を抜いており、広くアジアの中心としてこれからも成長していくと確信しています。

月報発刊500号は歴史の通過点であり、これからも更に長く永遠に継続していくことに意味があると思います。会員企業各位のご協力を得て、広報委員という重責を精一杯全力で担って参る所存でございます。月報創刊500号本当におめでとうございます。

JNTO SINGAPORE OFFICE

足立 基成

1970年創刊以来42年、まったく同じ年輪を刻んだ私にとって、この500号のタイミングに広報委員としてコメントできることに大きな縁を感じます。

2年前に来星した際は、GDP15%増、製造業生産高30%増など日本では考えられない経済指標のオンパレードに驚き、その成長力の日本への取り込みに、訪日旅行促進を通じて邁進しました。2年が経過した現在、シンガポールは、引き続き消費活動など好調なものの、人工国家として如何にその礎を保つか、そのような苦悩が見え隠れしている気がします。政治・経済ともに混沌とする我が国の進むべき方向性を鳥瞰する上でも、このシンガポールがどのような真摯な取り組みを実行するかに注目するとともに、そのような視点で月報の執筆を依頼したいと考えております。

私事ですが、この5月に第3子(長男)がマウントエリザベス病院で誕生しました。シンガポール政府の出生証明、日本の戸籍謄本いずれにも出生地シンガポールと記されています。おそらく長男は、シンガポールで生まれ、暮らしたことが記憶に残らない年齢での帰国になるかと思われますが、出生証明、戸籍謄本とともにこの500号に掲載される拙文もその証ししたいと思います。

JCCI広報委員会創刊500号 編集後記に代えて

シンガポール日本商工会議所 広報委員長
JAPAN AIRLINES CO LTD

河原畑 敏幸



JCCI「月報」は1970年(昭和45年)1・2月合併号を創刊してから40余年が過ぎ、本年7月号で記念すべき500号の発刊を迎えました。これは長年にわたるJCCI会員皆様のご支援と共に、広報委員として取材・編集にご尽力頂いた数多くの諸先輩・関係会員皆様の努力の賜物です。改めまして厚く御礼申し上げます。

さて本号は特別号として、所謂「温故知新」という訳ではありませんが、500号までの掲載記事の変遷と当時のシンガポールの状況や時代的背景を重ね合わせてお読み頂くことをテーマに編集致しました。如何でしたでしょうか？

振り返ってみますと創刊された1970年(昭和45年)前後は日本にとって何かひとつの大きな時代の節目であったように思われます。大阪万国博覧会開催(1970)に象徴されますように高度経済成長期がピークを迎え、翌年のニクソンショック、第一次オイルショック(1973)等により安定成長時代に突入。反面都市への人口の集中化/地方の過疎化現象の顕在化や公害問題の深刻化等々、急激な経済成長がもたらした負の遺産が顕在化していった時期でもありました。同様に社会面では60年安保闘争を起点に60年代後半活発化した左翼運動・大学紛争[東大安田講堂事件(1969)等]が沈静化され、この年の流行語に見られた「三無主義」「しらける」等若者を「無気力世代」と揶揄する風潮があった一方で、一部先鋭化した集団[連合赤軍・日本赤軍等]が航空機ハイジャック事件(1970)、海外空港での乱射事件(1971)、あさま山荘事件(1972)などを引き起こしました。因みに1974年1月ここシンガポールでも石油精製施設の

爆破事件を起こしています。「三島由紀夫事件」もこの年(1970)です。恐らく終戦後奇跡的な経済成長を遂げた反面、少々行き過ぎた自由化・民主化・資本主義化、親米化、過酷な競争社会等々に対して、多くの人々が善し悪しは別として大きな変革を求め始めた時代でもあったと言えそうです。因みに小生は中学に入学し、「サッカー、命」とばかり毎日ボールを追い掛け回しており(そうそうこの年にメキシコワールドカップ(1970)が開催されています。[ペレ(ブラジル)、ベッケンバウアー(西ドイツ)、ゲルトミュラー(西ドイツ)等々が出場])、何となく「世の中、騒がしいなあ」と感じていたくらいだったと記憶しています……。

別の観点からこの時代を捉えてみますと、「国際化の本格到来」と言ったキーワードにも辿り着きます。1970年には日本を代表する製鉄会社の大型合併、日本企業としては初めてとなるエレクトロニクス会社のNY証券取引所上場、ジャンボジェット機導入等々、1968年にGDP世界第二位となった日本の次の一手(国際化)が垣間見られました。19年間(1962-1970)といわれる高度経済成長期において多くの日本企業は海外に駐在員事務所・現地法人を展開し、とうとうジャンボ機を運航できるくらい多くの日本人ビジネスマンが海外主要都市と日本を往来する時代に入ったとも言えるでしょう。そしてここシンガポールでも在星日本企業のための経済団体であるJCCIの設立(1969)に至った訳です。

それ以降の日本経済のキーワードを挙げてみますと、日本列島改造論、オイルショック、狂乱物価、日米経済摩擦、ブラザ合意、円高不況、バブ

ル景気、消費税、住専問題、金融ビックバン、アジア通貨危機、インターネットバブル、聖域なき構造改革、いざなみ景気、金融再生プログラム、リーマン・ショック、(現在進行形)欧州ソブリン危機、東日本大震災・復興、原発問題、ギリシャ財政問題の再燃/ユーロ危機?(再度円高?)・・・等々といったところでしょうか?(快い言葉は少ないようです。)バブル経済崩壊後の「失われた10年」がいまや「20年」を越えてしまった状況です。そして中国に抜かれGDPも世界3位。震災復興、社会保障制度・財政等々数多くの改革と共に、如何に急成長するアジア経済を取り込み、再び持続的な経済成長軌道に乗せていくか?日本に与えられた時間はそれ程多くはないように思えます。

最後にガラッと話題を変えまして、その頃流行したCM、歌謡曲等を小生の独断と偏見にてご紹介させていただきます。

今後とも「月報」のご愛読、宜しく願い申し上げます。

CM 男性化粧品「マングム」:チャールズ・ブロンソンの男臭さに憧れた若者によって大流行

(続)CM「男は黙ってOOOOビール」:三船敏郎がCMに出た!「おとこ」を意識しろ!?

(続)CM「ディスカバージャパン」:センスの良いCMでした、国鉄さん。

(続)CM「違いがわかる男」:コーヒー「女房よろこぶ」:カレールー 男子厨房に・・・?

TVドラマ「細腕繁盛記」:意地悪役の富士真奈美さんの伊豆熱川地方の方言と関西弁(京都弁?)が妙に印象に残りました。「銭の花の色は・・・」

(続)TVドラマ「ありがとう」(健全)「時間ですよ」(少々不健全)「アテンションプリーズ」(・・・)

「低俗番組」という言葉もありましたね。(野球ケン番組打ち切り)

アニメ/漫画「あしたのジョー」:当時真剣に力石徹の「告別式」に参列しよう思っていました。因みに「巨人の星」は1968に放映開始。「巨人」「大鵬」「卵焼き」は少々古くなり、この時代は北玉時

代「北の富士・玉の海(実は初の外国人横綱)」が到来、1970年にKFCが名古屋に翌年マック(マクド)が銀座にそれぞれ一号店オープン。

(続)アニメ/漫画「ド根性ガエル」「ダメおやじ」「アシュラ」「ワル」「子連れ狼」:根性もの・お気楽ギャグもの・かなりのアウトロー的なものといろいろありました。

映画「ひまわり」:ロシアの大地(ひまわり畑)とソフィアローレンの涙が印象的

(続)映画「ある愛の詩(うた)」:「愛とは決して後悔しないこと」、思春期だった小生には少々刺激的、日本では1971の公開で確か「小さな恋のメロディー」と同時期だった?ようにも記憶していますが、両者とも鮮明に覚えておりますです、はい。この頃邦画はあまりパツとしなかったように思います。ほとんど記憶にございません。

歌謡曲「竹田の子守唄」「走れコータロー」「戦争を知らない子供たち」:GS(グループサウンズ)ブームが去りフォークソングが大衆化?

(続)歌謡曲「四つのお願い」「雨がやんだら」「経験」「男と女のお話」「ざんげの値打ちもない」「圭子の夢は夜ひらく」:かなり刺激的な歌・歌姫でした。

(続)歌謡曲「希望」「秋でもないのに」「手紙」「誰もいない海」「知床旅情」極めつけ「傷だらけの人生」

洋曲「明日に架ける橋」「Let it Be」「Venus」「雨を見たかい」「長い夜」:ベトナム反戦?

個人的推奨TV番組「三菱ダイヤモンドサッカー」:解説者岡野俊一郎さんを尊敬しておりました。(放映開始は1968年、この年に日本イレブンはメキシコオリンピックで釜本選手などの活躍で銅メダルを獲得しています。)多分かなりの低視聴率だったと思いますが、グループをあげて支援して頂き、1968-1988、1993-1996と長期にわたる放映、有難うございました。

その他の話題 ビートルズ解散:「アップル」と聞くと10年くらい前まで?はこちらの方と思うくらいレコードを聴きまくっておりました。少々生意気なガキでした・・・。

タクシー基本料金(東京都)130円 ビール140円、

かけそば100円

大卒初任給 4万961円 封書 15円 はがき7円

少々古ぼけた話題となってしまいました、ご勘弁の程…。

シンガポール日本商工会議所
事務局 便り

《JCCI 6月度行事報告》

6月度は会員講演会の開催が2件ありました。

6月19日(火)には、KPMGタイ パートナー 藤井 康秀 氏、KPMGシンガポール タックスパートナーLeonard Ong 氏をお招きし「ミャンマー投資セミナー」を開催致しました。昨今、日本企業のミャンマーへの投資ニーズが高まっている現状を踏まえ、投資環境・税法分野の観点をご解説頂きました。また、6月28日には「輸出管理セミナー～ Exporters Beware! ～」では輸出管理をテーマに、Bryan Cave International Consulting (Asia Pacific) Pte Ltdより、George Tan 氏 (Director) をお迎えし、シンガポールにおける輸出管理の内容と現状をご講話頂きました。

《今月の主な行事 ご紹介》

◆JCCI Workshop◆

「グローバル社会でこれから生き残るリーダー育成プログラム(第2回/全2回)」

◇日 時: 2012年7月11日(水) 13:00-18:00

◇場 所: Singapore Management University 内教室

◇講 師: (株)リーダーズアカデミー 嶋津 良智 氏

※内容は変更されることもございます。

《JCCI 7月行事予定》

開 催 日	行 事 名	主 催	時 間	場 所
7月9日(月)	JCCI 無料経営相談窓口	JCCI	13:30-15:30	商工会議所 会議室
7月10日(火)	7月度運営担当理事会 第508回理事会	JCCI	12:30-14:00	日本人会ボールルーム
7月11日(水)	Workshop「グローバル社会でこれから 生き残るリーダー育成プログラム(全2回)」	JCCI	13:00-18:00	SMU内教室
7月16日(月)	JCCI 無料経営相談窓口	JCCI	13:30-15:30	商工会議所 会議室
7月19日(木)	第1工業部会「シンガポール史跡視察」及び 懇親会	第1工業部会	①13:00-17:30 ②18:00-21:00	シンガポール島内
7月20日(土)～ 21日(日)	スリンアセアン事務局長、 アセアン日本商工会議所連盟の対話	アセアン日本 商工会議所 連盟		バンコク
7月23日(月)	JCCI 無料経営相談窓口	JCCI	13:30-15:30	商工会議所 会議室
7月30日(月)	JCCI 無料経営相談窓口	JCCI	13:30-15:30	商工会議所 会議室

※予定は事情により変更、追加されることがあります。

月報

July, 2012



発行

JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY, SINGAPORE
10 Shenton Way #12-04/05 MAS Building Singapore 079117
Tel: 6221-0541 Fax: 6225-6197
E-mail: info@jcci.org.sg
Web: <http://www.jcci.org.sg>

印刷

TOH-SHI PRINTING SINGAPORE PTE LTD
4 Ayer Rajah Crescent, Singapore 139960
Tel: 6775-2555 Fax: 6775-1661

シンガポール日本商工会議所

7月未

発売予定

2012年

賃金調査結果報告書

2012年4月から5月にかけて、会員企業を対象に賃金調査を行い、寄せられた回答をもとに2012年在星日系企業の賃金動向をまとめました。賃金の改定や今後の求人活動など、労働市場を見据えた経営判断を下す際にお役立て頂けます。是非ご活用下さい！

定価

会 員 S\$30.00 (税込み)

非会員 S\$100.00 (税込み)

内容は
以下のように
なっています！

- OVERVIEW
概略
- RESPONDENTS' PROFILE
回答状況
- EMPLOYMENT SIZE & RESIGNED
(EXCLUDING JAPANESE STAFF)
従業員数と離職率(日本人駐在員を除く)
- UNIONISATION OF COMPANIES
組合の有無
- UNIONS THAT UNIONISED COMPANIES
BELONG TO 所属組合
- WORKING HOURS PER WEEK
週間所定内労働時間
- MONTHLY VARIABLE COMPONENT とは？
- MONTHLY VARIABLE COMPONENT
月次可変部分給
- ESTIMATED WAGE INCREMENTS FOR 2012
2012年の予測賃金改定率
- WAGE INCREMENTS FOR 2011
2011年の賃金改定実施状況
- BONUS FOR 2011 (INCLUSIVE OF 1 MONTH AWS)
2011年ボーナス実績(AWS 1ヶ月含む)
- BONUS FOR 2012 (INCLUSIVE OF 1 MONTH AWS)
2012年ボーナス予測(AWS 1ヶ月含む)
- COMPANY FORECAST FOR 2012 BONUS IN COMPARISON WITH 2011 BONUS
2012年ボーナス(見通し)と2011年ボーナス(実績)との比較
- BUSINESS PROSPECTS
景気動向
- AVERAGE MONTHLY WAGES BY OCCUPATION
- CHANGES IN WORK PASS SYSTEM
ワークパスの制度変更について
- THE SINGAPORE LABOUR MARKET 2011
2011年のシンガポール労働市場
- RESTRUCTURING & RE-EMPLOYMENT 2011
2011年のリストラと再就職の状況
- EMPLOYMENT 1ST QUARTER 2012 (JAN-MAR)
2012年第一四半期の雇用状況
- LABOUR MARKET 1ST QUARTER 2012 (JAN-MAR)
2012年第一四半期の労働市場

★ 内容は変更されることがございます。

